

ロシアによるウクライナ侵略を巡って (その5 : 特にカホフカダムの破壊) 古屋 信明

はじめに

ウクライナ戦争に関して、インターネット等で知った私には興味深い情報を要約し、コメントを加えて、県立千葉高同期会ホームページに寄稿してきた。22年2月～9月の情報が「改1」、10月～23年1月の情報が「その2」、2月が「その3」、3月が「その4」であり、各々へは次のリンクから飛ぶことができる。

<http://chiba43.mane-ana.co.jp/furuya/furuya220922.pdf>

<http://chiba43.mane-ana.co.jp/furuya/furuya230206.pdf>

<http://chiba43.mane-ana.co.jp/furuya/furuya230306.pdf>

<http://chiba43.mane-ana.co.jp/furuya/furuya230408.pdf>

「その4」の「おわりに」で記したように、ウクライナ戦争の個人的ウオッチに疲れを感じ始めて4月以降お休みしていた。その後、23年6月6日にドニプロ川下流のカホフカダムが破壊され、ダム下流域が大洪水に呑み込まれるという惨事が発生した。ダムは、私が生業としていた土木工学の中心の一つであるので興味を抑えがたく、自分の理解の整理を兼ねて同期会HPをお借りしてまとめを試みることにした。この間、ウクライナ軍の反転攻勢開始、ロシア民間軍事会社の指導者プリゴジンの反乱などもあったが、これらは日々報道されているので取り上げない。それ以外の23年4月～6月に見つけた情報のいくつかは、個人的興味の赴くままに付記させて頂くことにする。

引用記事の日付は原則的には情報の発表日(私が知った日のこともある)であるが、「その5」では、今までのように日録風に並べるのではなく、3つのテーマ(1. カホフカダムの破壊、2. ロシアと他国の関係、3. その他の話題)毎に整理することにした。従前同様、枠線で囲んだ部分と括弧内の小文字が私のコメントであり、引用部分には括弧書きで区分することなく、私が調べた追加情報が含まれてもいる。

(記 2023年7月20日)

1. ドニプロ川のカホフカダム破壊

ダム破壊のインターネット情報を紹介する前に、ドニプロ川とカホフカダムについて主にWikipediaを参考に整理しておく。

1) ドニプロ川の源流は概ねモスクワの東200km、北緯55.9度、東経33.7度付近のヴァルダイの丘(標高220m)であり、東ヨーロッパ平原を南へ流れてベラルーシを経て、ウクライナに入りキーウ

中心を貫流して、最後はオデーサの東で黒海に注ぐ延長2285kmの大河である。流域面積は516,300km²。

2) 川の下流の約800km部分(ウクライナ領内)には、6つの巨大ダムによるダム湖が連続している。その最下流に位置するのがカホフカダムで、35万キロワットの出力を持つ発電所と、ダムによってできた水位差を克服して船舶を通航させるための閘門こうもんも設置されていた。閘門とは、2枚の扉で仕切られた閘室内に船舶が入り、そこに水を出し入れすることで船舶を「水のエレベーター」に乗せて昇降させるという仕組みである。パナマ運河のそれが有名である。ダムが作り出したカホフカ貯水池(湛水面積2155km²、貯水量182億m³)からの水は、ウクライナ南部とクリミア半島北部の広い地域を灌漑するために送られる。ダムの建設は1950年9月にソ連によって開始され、最後の発電機の運転開始は1956年10月であった(これで全計画が竣工)。

3) ダムは堤高30m、堤頂長(ダム天端の長さ)3273m、構造はWikipediaにはアースダム(土を盛って造る)とあるが、Google Earthをじっくり眺めて画面上を定規で測ると、左岸(東岸)から突き出す約1.7kmと右岸(西岸)からの1kmが盛り土構造、残りの中央部分0.6kmは重力式コンクリートダム(佐久間ダム、ハッ場ダムのように日本には多い形式。今回はここが破壊された)になっている。これらの合計は3.3kmとなり、公式堤頂長3273mと一致する。閘門は東側盛り土のほぼ先端に位置しており、発電所は閘門西側に造られた小島のさらに河心側にある。発電所から先がコンクリートダム部分である。「重力式」とは、水圧にダムの自重で抵抗するという意味だが、そのためにダムの流水方向の断面はほぼ直角三角形になっている(堤高≒底部厚さ)。ダムの下流側斜面は洪水吐きになっていて、洪水時にダムに溜めきれない水が滑り台のように流れ下る。堤頂にはゲート(ダム湖水位を調節する)が設けられており、利水のための取水管はダム下部にある。またカホフカダムでは、堤頂部に道路橋と鉄道橋が架けられていて、大河の両岸を結ぶ交通路も提供していた。

4) 現在では閘門位置まで、左岸下流側に埋め立てによる土地造成と市街化が進んでいる(ここが今回の破壊に伴う洪水で最も大きな被害を受けたという)。カホフカダムによって河水の多くは灌漑用水となるから、洪水危険性は除去されたという判断があって、街を河心方向に広げたのであろう。つまり、川幅が以前は3.3kmあったものが、今は半分になっているということだ。

5) 土とコンクリートによる混成ダムは、日本では珍しい。日本では耐震性が重要だから、「木に竹を接ぐ」ような構造には及び腰になる。両部分の地震時の揺れ方の差が水漏れを呼ばないか、などが気になるのである。

6) カホフカダムと日本のダムとの大きな違いは、堤頂長、湛水面積、貯水量である。大陸の大河に建設されたダムであることを見せつける。日本では、例えば黒部ダム(堤高186m)は、堤頂長492m、湛水面積3.5km²、貯水量2億m³(日本一は岐阜県揖斐川の徳山ダムの6.6億m³)である。ダム湖ではないが日本最大の琵琶湖の水面積は669km²、貯水量は270億m³である。カホ

フカダムは琵琶湖に比べれば、水面積が3.2倍なのに貯水量は0.67倍であり、傾斜の緩い広々した谷に浅い湖を造ったことが理解できる。琵琶湖の平均水深：27立方キロメートル÷669平方キロメートル=40mと比較すれば、18.2÷2155=8.4mに過ぎない。ちなみに現在のダム貯水量世界一は、ジンバブエ〜ザンビア国境のカリバダムの1806億 m^3 。有名なナイル川のアスワンハイダムは1620億 m^3 。

7) ロシアはウクライナ戦争開戦とともにクリミア半島からも部隊を進め、ドニプロ川を越えヘルソン州の大部分および西岸に位置する州都ヘルソンを制圧した。しかし、夏以降ウクライナ軍はヘルソン州の奪還作戦を進めるとともに、アメリカから供与されたハイマース(精密誘導ミサイル)を使用してドニプロ川を越えるロシア補給線を圧迫した。そのため補給は次第に困難となり、10月には親ロシア派市民が船でドニプロ川を渡り、東岸へと避難を開始した。

8) 11月に入るとロシアは部隊もドニプロ川東岸へ撤退させることを発表、11月11日にはウクライナ軍がヘルソン市に入った(ロシアに占領された4州のうち初の州都奪還)。また、同日、ドニプロ川にかかる数少ない大型橋であったアントノフスキー橋(カホフカダムの下流)が完全に破壊されていることが確認された。これは明らかにロシアの仕業で、ウクライナ軍のさらなる東進を妨げるためである。かくして、ヘルソン州内のドニプロ川は両軍が対峙する最前線となり、以降ロシア軍はドニプロ川東岸の防衛強化に注力した。

9) カホフカダム破壊の話に入る前に、一般的なコンクリートダム建設手順を説明しておきたい。現在の日本での技術・経験を踏まえた説明であるが、1950年代でも同じはずだ。

① ダム建設地点は概ね深い山中なので(カホフカは違うが)、そこに至る工事用道路(and/or)鉄道を整備する。運ぶものは働く人たちの日々のニーズ、建設工事に必要な機械類や燃料、セメント、水車・発電機など(一番重く、かさばる)。大きな土木工事は大作戦と一緒に、兵站が大切である。

② 次にダム建設地点を干上がらせる。そのために日本では、すぐ横の山に「仮排水トンネル」を掘り、トンネル入り口・出口付近に水を堰き止めるための仮締切り堤を造る(流れている元の川の中に強引に土砂を投入する)。ダム建設期間中の河水はトンネルを経由することになる。ドニプロ川(揚子江の三峡ダムも)のような幅広の時には、「半川締切り工法」を用いる。川を概ね2等分するように仮締切り堤を造り(これもまた大変な力業)、まず左岸側の建設・河水は右岸側を流れ、次の段階では左右を入れ替えるという方法で進める(水は左岸側に完成した本設の放流管を通過する。左右の施工順は個別に決定)。

③ 河床に厚く堆積していた岩塊・砂礫などを取り除き、新鮮な岩盤を露出させ、岩盤弱層部は丁寧に除去する。岩塊(砕いて砂利にする)や砂礫はコンクリートの骨材として利用する。この時、岩盤の強度・変形性などを試験で確認し、着工前のボーリングで得られていた設計用数値の検証をする。

④ 現場に設置したプラント(生コン工場)によってコンクリートを製造し、種々の方法(谷をまたぐケーブル・クレーンなど)でコンクリートを打設区画に運搬して、打ち込んでいく。プラントの製造能力(m^3 /日)、コンクリートが硬化する時の発熱の除去方法などから、区画の面積(m^2)と1日あたりの打ちあがり高さ(m /日)が決まる。打設ブロックの寸法は日本では、川幅方向・流水方向ともに20~30m程度(or以上)にすることが多い。

コンクリート硬化時には熱が発生し、ひび割れの原因になる。その対策としては、打設時にパイプを配管しておき、そのパイプ内に冷水を通すパイプ・クーリング、あるいはコンクリート材料のうち水や骨材をあらかじめ冷やしておくプレ・クーリングなどがある。本州四国連絡橋の工事でもコンクリート硬化熱の対策は重要な技術課題であり、低発熱型セメントの開発まで行った。

⑤ コンクリートがある程度の高さにまで打ち上がると、監査廊(ダム内の点検用通路、打設時に型枠で空間を確保してあった)から、コンクリートを貫通して基礎岩盤の深くにまで達する削孔をし、高圧でセメントミルクを注入する。グラウチングといい大切な作業である。微小な割れ目に入ったセメントミルクは固まって、岩盤の透水性を低下させ力学的特性を向上させて、ダムの安全性を高めるのである。監査廊は複数あり、完成後のダムの変形や歪み、漏水量、コンクリート温度などをモニターするための計器も設置される。カホフカダムでは、この監査廊内に大量の爆薬が仕掛けられたと推察する。

なお、セメントミルクとはセメント粉を水で溶いたもの(明るい灰色をしている)、これに砂を混ぜるとモルタル、さらに砂利を混ぜるとコンクリートになる。

⑥ 堤頂のゲート、洪水吐き附属設備、発電設備などを設置し、最後に川の流れを元に戻して、ダムの完成となる。

23.6.7 ウクライナ南部のダム破壊、得をするのは誰なのか (フランク・ガードナー、英国 BBC 安全保障担当編集委員)

1) ウクライナ南部のロシア支配地域にあるカホフカダムが6/6に決壊し、大量の水が下流に流れ出た。この破壊行為で誰が得するのか? これをめぐってロシアとウクライナが互いを非難し合っている。西側諸国は即座にロシアに疑惑の目を向けた。しかしロシアは二度(もう1つは22年9月の海底ガスパイプライン・ノルドストリーム)とも、「私たちではない。なぜ私たちがこんなことをするのか。自傷行為になる」と反論した。

2) カホフカダムの決壊では、ロシアは少なくとも二つの点から自国の利益を損なうものだと主張できる。一つには下流の土地が浸水したことで、ロシアは自国の兵士と住民らを、ヘルソン州やドニプロ川の川岸からさらに東へと避難させる必要が生じた。このことは、ロシアの砲撃やミ

サイル攻撃に連日さらされてきたドニプロ川西岸のウクライナ住民に一息つかせることによる。

3) もう一つの理由は、ロシアが占拠しているクリミア半島における水の供給に影響を与えかねないことである。同半島は乾燥地で、カホフカ湖の真水を北クリミア運河(正確には水路)で引いて頼りにしていた。

4) ウクライナ戦争全体という文脈で考える必要もある。ウクライナの目標は、クリミアとウクライナ東部ドンバス地方の回復であるから、ウクライナ軍がザポリージャ南部のロシアの防衛線を突破し、周辺の土地を分断できれば、クリミアを孤立させ、大きな戦略的勝利を収めることになる。しかし、ロシアは昨年2月にウクライナ侵攻を始めて以来、多くの教訓を得ている。ウクライナが攻撃してくる可能性が高い場所を特定し、アゾフ海を目指して進撃してくるウクライナ軍を阻止しようと、ここ数カ月間、非常に強力な防御陣地を構築してきた。

5) 今回のダム破壊は、誰がやったにせよ、ウクライナの戦略・戦術選択をはるかに困難なものにするだろう。ドニプロ川はウクライナ南部では川幅が広い。そのため、ロシアの砲撃やミサイル、さらにはドローン(無人航空機)の攻撃可能性がある中で川を渡るのは、ウクライナ装甲部隊にとって極めて危険度が高い。そのうえ、ダムの決壊で下流の広大な土地が浸水したことで、ドニプロ川東岸地域には事実上、装甲車両が入れなくなってしまった。ウクライナの反撃において、次の一手を遅らせる可能性がある。

6) しかし、歴史を振り返るとロシアには「過去」がある。1941年、当時のソ連はドイツ軍の進撃を阻止するため、ドニプロ川のザポリージャダム(今はカホフカの1つ上流に所在)を爆破した。それによって発生した洪水では、ソ連の国民数千人が犠牲になったとされる。

2) ロシアが自国領だと主張している左岸も水没し、そこに住む人々(親ロシア派であれウクライナ人であれ)の生活が困難になっているのに、ロシアは国連の援助が入ることを拒否した。

3) 2014年のロシアによるクリミア併合に対する報復として、ウクライナはこの水路の出発点を塞いだため、それ以降クリミアは水不足に悩んできた。今回の侵攻でロシアがまず行ったことは、水路の回復であった。

5) 逆に、ダムより上流側はカホフカ湖がなくなって、広大な元湖底(ぬかるんでいる?)と細々とした水流に変わってしまったはずだ。「降水量不足でダム水位が下がって、水没していた昔の集落跡が顔を出した」とニュースで報じられるような感じで…。だから、かえってウクライナ軍には進撃しやすくなったのではないだろうか、個人的には思っている。

6) 今回の開戦劈頭、ベラルーシから南下してキーウ占領を目指したロシア軍部隊を食い止め、傀儡政権を早期に成立させて戦争勝利するというプーチンの意図を阻止したウクライナ軍の善戦の陰には、自ら実行した小ダムの破壊がある。キーウ北方でドニプロ川支流イルペン川の小ダム(キーウの水源の一つでもあった)を破壊して、あたり一面を水没・泥濁化させた。そのためロシア軍は、より西方の限られた数の道路を使用せざるを得なくなり、映像でも有名になったロシア軍車列が何十kmにも及ぶ渋滞で全く動けない状況(そして時折にウクライナ軍の攻撃を受けて車両が爆発・炎上する)になったのである(秦郁彦著『ウクライナ戦争の軍事分析』、新潮新書)。

23.6.8 ウクライナの決壊したダム、数日前に一部損傷か(米CNN)

1) カホフカダムが決壊した事案で、決壊の数日前にはダムの一部が損傷していたことが衛星画像の分析で明らかになった。ダムでは5日夜から6日未明にかけて構造破壊が起きていた。米宇宙企業マクサーの衛星画像によれば、ダム堤頂の道路橋は5月28日には無傷だったが、6月5日の画像では橋の一部が失われている。低解像度の衛星画像を分析したところ、橋の一部が失われたのは6月1日から2日にかけてだったことがわかった。

2) CNNは、ダム堤頂を通る道路橋の損傷がダム決壊の一因となったのか、あるいは、紛争当事国のいずれかがダム本体に意図的な攻撃を加えて破壊したのか、独自に確認できていない。

2) 堤頂の道路橋の損傷がダム本体の破壊を引き起こすことなど、工学的にあり得ない。道路橋は、ダム水位を制御するゲート(水門)を支える柱を橋脚にして洪水吐きの上を渡っているものであり、この柱の設計荷重は圧倒的にゲートに作用する水圧(水平力)であって、橋からの鉛直荷重は取るに足りない。柱の有無はダム全体の安定性・安全性には関与しない。

ロシアが主張していたようにウクライナの砲弾かミサイルが命中したとしても、コンクリート重力式ダムのようなマッシブな巨大構造物を破壊する爆発威力はない。同じ場所に何百発も着弾させれば可能性があるかも知れないが、そのような射撃は無理だし、6/10で紹介するマグニチュード1~2の震動も発生しない。ゲート(鋼構造)に命中したら、これが破壊される可能性はある。すると、そこから急速に越流が始まるが、この区間はコンクリート造であるから、越流によってダムコンクリートがえぐられていて、河床部まで傷口が広がることも考えにくい。

YouTubeの映像を見ると、発電所区画の西隣でかなりの勢いのある水の流出が始まり、ついで重力式ダム全体と発電所の東側で全面的な越流が起こっている。しかし、両岸のアースダム部分は破壊を免れている。

私個人の推測は次のとおりである。

① 破壊の起点はダム内部の爆発。重力式ダムは三角形断面をしているから底部は厚くなるが(概略、堤高と同程度)、カホフカダムの堤高は大きくないため底部でも割合に薄く、監査廊内の爆発による損傷はダム表面に達した。

② 損傷部を通過する水流は、水圧が効いているから高速であってコンクリートを侵食し、侵食はやがて基礎岩盤に達した。岩盤の洗掘は河心方向に進んでいき、支えを失った重力式ダム部分が、建設時のコンクリート打設ブロック毎に次々と下流側に押し倒された。日本で洪水時に橋が崩落する最大要因である、河底洗掘による橋脚倒壊みたいなイメージ。

③ というのは、重力式ダムの力の釣り合い(水圧とダム自重)は、コンクリート打設時のブロック毎に成立しているから、隣のブロックに力を伝えてはおらず、重力式ダムはもともと堤頂方向には構造的に一体ではないのである。ブロック同士をつなぐ鉄筋もなく、ブロック間は漏水させないだけの処置でよい。

23.6.8 実行犯はロシアで間違いなし (パトリシア・ルイス / 英王立国際問題研究所ディレクター、読売新聞)

1) ダム破壊実行犯は明確にロシアだと考える。長い間ロシアは、ダム爆破を計画していたようだ。彼らは昨年秋に、自分たちが管理していたダムのあちこちに爆薬や地雷を設置した。洪水と瓦礫と一緒に、地雷のような物が引を下り、広範囲に散らばった。不規則な地雷原を広範囲に作ってしまったわけで、ウクライナ軍の作戦、あるいは戦後の復興の大きな支障になるだろう。

1) 爆破が6/6だった理由が私には想像できない。核兵器使用はハードルが高いからその政治的インパクトを避けて、同じぐらいの広範囲被害をもたらせる手段としてダムを狙ったのかもしれない。でも何故、ダムがあるために水量の少ない下流でウクライナ軍がクリミアを目指して渡河を開始した、という瞬間でなかったのか？ ウクライナの精鋭部隊をNATOから供与された戦車もろとも溺れさせることができたはずなのに。またその可能性が、ダム下流での渡河作戦をウクライナ軍に躊躇させることになっていたはずなのに。さらにダムを破壊しなければ、満々たるカホフカ湖は上流側での渡河も阻止していたのに……。

個人的想像であるが、ロシア軍工兵の技量の低さ(目標日時以外での爆破)、あるいは指揮命令系統の混乱によるpremature explosion(過早爆破)だったのではないのか？ または、p8の16)に登場する「プーチン政権にありがちな失敗」が原因なのかも。

23.6.10 ダム決壊前に爆発か 米偵察衛星検知と報道 (共同通信社)

1) 米紙ニューヨーク・タイムズ電子版は9日、ウクライナ南部のカホフカダムが決壊する直前に爆発があったことを米偵察衛星が検知していたと報じた。米政府高官の話としている。米情報機関の分析官はロシアがダム決壊に

関与したと疑っているが、関与を示す確かな証拠は得られていないという。この高官は、衛星に設置されている赤外線感知センサーがダムで高熱を検知し、大きな爆発の特徴と一致していたとしている。

1) ノルウェーの地震観測所が、「ルーマニアに置かれていた地震計がちょうどその時刻・その付近で、マグニチュード(M)1~2相当の震動を検出していた」、と6/10に発表した。自然の地震は、断層面に沿って両側の岩盤が反対方向に滑ることで起きるため、そこから発生する地震波は横波(水面を伝わる波のように振動する方向が進行方向に垂直)が主要エネルギーを伝えるが、爆発現象による地震波は、微小空間が瞬間的に拡大することによるから、縦波(音波のように振動方向と進行方向が同じ)を主体にする。だから、震動原因が地震か爆発かと迷うことはない。

砲弾やミサイルの爆薬量はせいぜい数10kgであるし、ほとんどは標的表面上で爆発するから(音や破片散乱に費やされる爆発エネルギーが少くない。それを防ぐために深く貫通してから爆発するタイプの弾頭もあるが)、M1~2という大きな震動を生むはずはない。重力式ダムを破壊するには大量の爆薬をダム内部空間に装填しておくことが必要はず。それが可能だったのは、ダムをずっと管理下に置いていたロシア軍しかない。

23.6.10 戦争で「ダム破壊」なぜ？ どうやって？ 敵味方も影響大、WW2や朝鮮戦争の「ダムバスターズ」たち (白石光 / 戦史研究家、乗り物ニュース)

1) ダムは、産業や国民生活に必要な発電や、工業用水や飲料水の供給、下流域の治水にも関わる重要な施設です。ゆえに戦争では、敵国のダムを破壊して電力や工業用水の供給を断ち、飲み水を不足させ、洪水を起こして国民の生活と生命を脅かすという、戦略的影響を及ぼすことができます(今は国際法で禁止)。そのため古今東西で行われてきた経緯があり、近いところでは第2次世界大戦や朝鮮戦争においても実行されています。その実態は、どのようなものだったのでしょうか。

2) 第2次世界大戦中にダム破壊を行ったのはイギリスです。同国空軍は当時、「ドイツ工業の心臓」とも称されるルール工業地帯への戦略爆撃を繰り返していました。同地がドイツの軍需生産における中心地であったからです。しかし重要地域ゆえにドイツ側も必死で防衛しており、イギリス側の損害は甚大でした。

そこで考えられたのが、ルール工業地帯に電力を供給している水力発電所のダムを破壊することでした。これに成功すれば、軍需工場への電力と工業用水供給を遮断できるほか、住民に対しては飲料水不足というダメージを与えることが可能で、さらに下流域へ洪水を引き起こすことができます。

3) このアイデアを実現するため、イギリス空軍は巨大なドラム缶型爆弾「アップキープ」を開発しました。これは反跳爆弾と呼ばれるもので、低空飛行する航空機から後ろ向き回転をつけた状態で投下すると、ちょうど石投げの「水切り」のように爆弾が水面を跳躍しながら進みます。やがてダム胸壁にぶつかり、それに沿って水中に沈むと、一定の水深で水圧信管が作動して起爆し、その爆発で生じた大きな水圧によって胸壁を崩すという、特殊な爆弾でした。

4) 強大な水圧を発生させるために、「アップキープ」は重量約4トンにもなったので、それを搭載する爆撃機にはイギリスが誇る大型の戦略爆撃機アプロ「ランカスター」が選ばれました。そして、「アップキープ」は機体下にむき出して取り付けられ、逆回転を与える特殊な装置も装着。しかも、高度約18mという超低空で投下しなければならなかったため、この任務に向けて特別に編成された第617中隊は、4発エンジンの大型爆撃機を超低空で飛ばす訓練に明け暮れました。

5) 攻撃目標には、ルール工業地帯のメーネダム、ゾルペダム、エーデルダムなどが選ばれ、今から約80年前の1943年5月17日、第617中隊は特別改造した19機で出撃し、機体側のモーターとチェーンで繋がった爆弾に飛行方向と逆向きのスピンを与えつつ、ダム湖面すれすれに対空砲火を侵して攻撃進入していった、見事ダムの破壊に成功しています。そのため、第617中隊は「ダムバスターズ」の愛称で呼ばれるようになりました。この攻撃の結果、ダムは決壊。下流域約80kmにおよぶ地域に大水害が生じ、死者約1300名、操業が停止した軍需工場約125か所、流された橋25本、一時的に使えなくなった農地約3000ヘクタールという大損害をドイツに与えました。しかし対空砲火も激しく、出撃した19機中の8機が撃墜されています。

6) 約70年前の朝鮮戦争中にダムを破壊したのは米軍です。1951年5月1日、空母を旗艦した「スカイレイダー」艦上爆撃機8機が、Mk.13航空魚雷を用いて北朝鮮軍占領中の韓国の華川ダムを攻撃しました。放った魚雷のうち7本が命中して6本が起爆、ダムの部分破壊に成功しています。この戦果から、この部隊は愛称を従来の「タイガース」から、ダム破壊の「先輩」であるイギリス空軍第617中隊と同じ「ダムバスターズ」へと変更しました。

3) 爆発力を標的に伝えるには、空気中での表面爆発は効率が悪い。爆発エネルギーが音や破片飛散に消費されてしまうからである。効率的に爆破するためには、目標内部に爆薬を設置することが望ましい。そのため、トンネル掘りのような土木工事では、岩盤に穿孔して穴の底に爆薬を詰め、爆発エネルギーが大砲を打つように抜けて行ってしまふことを防ぐために、穴の出口を堅く栓をしてから起爆する。水は単位体積重量が大きく非

圧縮性(圧力が加わっても体積が変化しない)であるから、衝撃力を効果的に伝え得る。

6) 魚雷とは、スクリューを回して海中を走り、敵艦船の横腹に穴を開けて浸水させるといふ、海中ミサイルのような兵器である。

最新型は直撃するのではなく、目標の少し下で爆発して、それによって生じる水圧で目標を持ち上げて船体を2つにへし折れる、というようなタイプもある。2010年に黄海で、韓国海軍の哨戒艇「天安」が北朝鮮潜水艦の魚雷攻撃を受けて真っ二つに折れて沈没し、46人が戦死するという事件があった。北朝鮮は当然、犯行を否認したが、2分割された船体が全て回収され、刻印つきの魚雷の破片も海底から引き揚げられて、韓・英・米・豪・スウェーデンの合同調査団が上記のような結論に達した。

魚雷は潜水艦や水上艦艇からも撃てるが、航空機から投下するタイプが航空魚雷であり、Mk.13は太平洋戦争後半の米軍機用の制式魚雷で爆薬量270kg。これで戦艦大和、武蔵など、日本の多くの艦船が沈められた。

23.6.13 諦めか「古典的防御策」か？ 補給ルート自ら断つ、ロシアの意図不明な「巨大ダム破壊」の謎 (イザベル・バンブルゲン、ジョン・ジャクソン、Newsweek)

1) カホフカダムの爆破についてアナリストからは、なぜロシアが(ロシアが犯人だとすればの話だが)クリミア半島に破壊的な打撃をもたらしかねない行動を取るのかと、疑問の声が上がっている。プーチンは、「ロシア帝国」を再現するという野望達成の礎だったクリミアに見切りをつけたのか？ ゼレンスキーをはじめとする面々はこの可能性を指摘しているが、それとは異なる見方もある。

2) 米ジョージタウン大学の経済学者アンダース・オスレントは今回のダム爆破を、サダム・フセイン元イラク大統領による油井破壊になぞらえる。フセインは湾岸戦争中の1991年、クウェートからの撤退を余儀なくされた時、イラク軍にクウェートの油井への放火を命令したといわれる。今回のダム破壊は「失ってしまうことが明らかな領土を破壊しようという考え方」だと、ロシアとウクライナの両政府で経済顧問を務めた経験を持つオスレントは解説する。「諦めがもとになっている行動だと思う。攻撃というよりは負け惜しみだ」。

3) オスレントは、カホフカダムは、クリミア半島を維持する上で大きな役割を果たしていると指摘する。「クリミア半島に必要な水の85%を供給する北クリミア運河は、カホフカダムから取水している。このダムがなくなったら、クリミアはいずれもたなくなる」。オスレントは、このダムの爆破はクリミアの農業を破壊しかねないとも語る。北クリミア運河の水の大半は農業や工業に使われ、飲料水に回るのは約2割だ。

4) クリミア半島は2014年、プーチンによって一方的にロシアに併合された。昨年2月から続くロシアの侵攻に対して、ウクライナが反撃の勢いを得るようになると、ゼレンスキーは停戦条件の一部として「クリミア半島はウクライナの領土と認識されるべきだ」と口にするようになった。プーチンは、将来結ばれるいかなる和平協定でもクリミア半島はロシアの一部にとどまり、また昨年9月に併合したウクライナの4州も永遠にロシアの一部だと言い張っている。ロシアのペスコフ報道官は、ダム破壊はウクライナ側の仕業だと主張。クリミアへの水の供給に影響を及ぼす可能性がある」と認め、ウクライナの狙いはクリミアから水を奪うことだと語った。

5) ウクライナ側は、カホフカダムの爆破はロシアの仕業だとし、ゼレンスキーはオンラインでの声明でこう語った。「ロシアが意図的にカホフカダムを破壊したという事実は、ロシア軍が既にクリミア半島から逃げ出す必要性を認識していることを示している」。

6) ロシアが任命したクリミア自治共和国のセルゲイ・アクショーフ首長は、北クリミア運河の水位がさらに低下する危険を認めている。「ほかにも水源があるとはいえ、クリミアが飲料水不足に直面する可能性はある」。

7) 多くのアナリストは、ダム爆破は単純に軍事的な理由で行われたものであろう、と考えている。ベクトフは「ウクライナ軍が(ダムのある)ドニプロ川の東岸に到達できないようにして、反転攻勢を阻止しようとした可能性がある」と指摘する。米陸軍のステーブ・ブントウイッティ退役中將も、プーチンがウクライナ軍の動きを鈍化させるための攻撃を命じた可能性があると言う。「戦争では得てして、こういうことが起こるものだ。ダムを爆破した結果、水が農地や内陸に流れ込み、地域一帯がぬかるんでいる。装甲車両が泥にはまり、一帯を横断できなくなる」。

2) 燃える上がる油田からの煙で視界が悪くなってしまい、旧式の照準装置しかないイラク軍のソ連製T-72戦車は米英戦車を発見できないのに対し、米エイブラムス/英チャレンジャー戦車のデジタル照準器は煙を通してはっきりとT-72を捉え、これが一方的な戦闘結果(その3のp2)につながった。p4左側(6/8記事)にコメントしたように、私には今回のダム爆破はロシア軍の行動にも悪影響を与えるような気がしている。

「失ってしまうかも知れない領土を破壊するという負け惜しみ」・・・気になる指摘だ。自分のものにならないならば、誰のものにもならぬように壊してしまえど？ 今までの、ロシア軍による民間施設への容赦ない攻撃もそうだったのか？ 「改1のp8」で「ロシアの暴虐に見る精神の闇」として、ロシア文学者・亀山郁夫さんの言葉を紹介した: 「どうしてロシアでは人命の価値が低いのか？ それは、彼らが深い運命論に支配されているから。ロシア人の魂の核心に潜む謎の正体はマゾヒズム・・・」。

23.6.15 ロシアとウクライナ農業に痛手のダム決壊で砂漠化進む？ (服部倫卓/北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授、Wedge ONLINE)

1) 6月6日のカホフカダム破壊に対して、ロシアとウクライナは、これは相手側の仕業によるものだとし、非難を応酬している。また、これまでの戦闘で損傷の進んでいたダムが自然に崩壊したのではないかと、という見方も一部にはある。現時点では、原因を特定するのは不可能である。ただ、国際的にはロシアによる意図的な破壊であったとの見方が主流だ。個人的にも、ウクライナによる反転攻勢の選択肢を狭め、また時間稼ぎをするためにロシアが意図的に破壊したと考えるのが自然という気がしている。

2) ダム決壊を受け、ウクライナ農業省は、農地の水没による被害(7/10毎日新聞: 来日中のウクライナ農業省の部長談では20億ドル)が発生し、また今後土地が砂漠化する恐れがあると指摘した。ただ、断片的な報道からだけでは、「水没」と「砂漠化」がどう結び付くのか、疑問に思った方も多かったのではないかと。今回のコラムで、そのあたりを解説してみたい。

3) ウクライナ南部のこの一帯は、ステップ気候である。土地は肥沃なものの、雨が少なく乾燥しており、夏には気温も上がる。自然状態では、必ずしも農業に最適な土地ではない。このようなウクライナ南部を豊かな農地に変えたのが、ソ連時代に進められた大規模灌漑であった。とりわけ、ドニプロ川下流に1950年代に建設されたカホフカ貯水池が、その水源となった。

4) 今回それを溜めていたダムが決壊し、カホフカ貯水池の水位が急激に低下した。今後、カホフカ貯水池から水を引けないとなると、ウクライナ南部各州の灌漑システムは、ヘルソン州で94%、ザポリージャ州で74%、ドニプロペトロウシク州で30%、機能しなくなるという(ロシアによる占領地域は除いた計算)。ダム決壊がもたらす農業への打撃で、最も懸念されるのがこの地域である。ウクライナ農業省が警鐘を鳴らしている「砂漠化」というシナリオも、カホフカ貯水池の水位低下により、灌漑ができなくなることを主に念頭に置いているはずである。この一帯を豊かな農地に変えた農業用水が失われれば、水の乏しい元のステップ地帯に戻る恐れがあるからである。

ウクライナ農業省の発表には、被害を強調するための誇張も若干込められていると思われる。実際には、羊を放牧して草を食べ尽してもしない限り、「砂漠化」までは行かないはずだ。それでも、豊潤だった農地が荒地と化して、耕作が放棄されたりする可能性は否定できない。

5) 一方、水没したエリアでは、当然のことながら、水に浸かった作物が駄目になってしまう。また、ウクライナ農業省によれば、水没した農地には特別な土壌修復作業が必要になるという。ただ、面積から言えば、上述のように

灌漑システムが機能しなくなることによって被害を受ける農地の方がより広大で、なおかつ影響が長期化するのではないだろうか。

6) ヘルソン州は「スイカの名産地」と言われていたが、灌漑システムの麻痺が懸念されるヘルソン州、ザポリージャ州、ドニプロペトロウシク州は、どのような農業地域だったのだろうか？ ウクライナといえば、穀物とひまわりを中心とする採油作物の生産・輸出が有力なので、3州における比較をしてみた(服部教授のオリジナルロゴグラフが示されている)。ウクライナが史上最高の豊作を記録した2021年のデータであり、ロシア侵攻前の状況ということになる。この中で穀物・採油作物の収穫量が最も多いのがドニプロペトロウシク州で、農業生産の数字が確認されるウクライナ24地域のうち5位の収穫量であった。ザポリージャ州は13位、ヘルソン州は14位で、穀倉地帯という観点では中位ということになる。

7) 作物の構成では、ザポリージャ州とヘルソン州は小麦、大麦、ひまわりが中心で、ドニプロペトロウシク州の場合には、それにとりもろこしも加わる。小麦と大麦は、これら3地域でウクライナ全体の4分の1ほどを生産しているので、仮に灌漑の機能不全が長期化すれば、グローバル市場への影響も無視できなくなる。

8) ちなみに、ソフィア・ローレン主演の映画『ひまわり』は戦争で引き裂かれた男女を描いているが、有名なシーンである画面いっぱいのひまわり畑の撮影地はヘルソン州であると、長く言われてきた。しかし、最近日本のNHKによる調査報道で、実はウクライナ中部のポルタヴァ州である可能性が高いことが明らかになった。とはいえ、名画の舞台と言われて納得してしまうほど、ヘルソン州にも広大なひまわり畑は広がっている。

9) ヘルソン州の場合は、穀物・採油作物もさることながら、青果物をウクライナ国内に供給する重要産地となってきた。21年の生産量で見ると、ナス(国内シェア39.6%、以下同)、スイカ(33.5%)、トマト(27.8%)、キュウリ(11.0%)、タマネギ(8.6%)といった作物でウクライナ1位となっていた。22年にロシア軍がヘルソン州を占領した結果(ただし11月にウクライナが主要部分を奪還)、ウクライナ国内の野菜・果物が値上がりしたのも当然であった。今回のダム決壊によって、短期的にも、中長期的にも、ウクライナの青果物供給に支障が生じることが懸念される。

10) さて、ダム決壊と貯水池の水位低下は、ロシア側にとっても深刻な打撃をもたらすことになる。そもそも、ドニプロ川下流域では、ウクライナ側がすでに奪還した右岸(北西岸)よりも、ロシア側が占領を続けてきた左岸(南東岸)の方が土地は低く、実際、より広大なエリアが水没している。むしろ、目下ウクライナが反転攻勢を進めているところなので、ロシア側がいつまでこのエリアを支配できる

のかは、不明である。とはいえ、ロシアはヘルソン州やザポリージャ州を自国に編入する手続きを終えており、当該地域の経済再建を進めたいという思惑があったはずだ。その際に、ロシア支配地域においても、産業の中核となるのは農業である。それが、ダムの決壊により、条件がさらに厳しくなった。

11) そして、ロシアにとってさらに重大なのが、14年に一方的に併合したクリミアへの水供給である。ソ連時代の1960年代から、クリミア半島への水供給は、「北クリミア水路」を通じて行われてきた。なお、わが国の報道などでは「北クリミア運河」と呼ばれることが多いが、船が航行するわけではないので、ここでは正確を期して「水路」と呼ぶこととする。ちなみに、全長400キロメートル以上で、欧州最長の水路である。問題は、北クリミア水路の起点が、まさにカホフカ貯水池であることだ。高低差を利用して、貯水池から水路へと自然に水が流れ込むように設計されているため、貯水池の水位が低下したら、水路も機能しない。

12) 北クリミア水路を巡っては、14年にロシアがクリミアを併合した後、ウクライナ側はまず土嚢を積んで北クリミア水路の水量を制限し、次にコンクリート製のダムを造って水を堰き止めた。そこから先の北クリミア水路は、数年間干上がった状態となっていた。クリミアで利用する水の85%ほどは、北クリミア水路によるものだったといわれている。それを遮断されたことは、ロシアにとり大打撃だった。ここ数年、ロシア支配下のクリミアは現地の溜池と地下水だけでしのぐことを余儀なくされ、水不足が続いた。

13) 22年2月24日にロシア軍がヘルソン州に侵襲し、真っ先に実行したことがウクライナ側が建設したダムを爆破し、北クリミア水路を復活させることであった。もちろん、「そのためにヘルソン州を攻めた」わけではないだろうが、「ヘルソン州を支配したら真っ先にやりたかったこと」であることは疑いない。

14) 日本などと比べればはるかに小規模ながら、実はクリミアは旧ソ連における稲作地域の一つであり、地場産業としてはそれなりに重要であった。当然、水を多用する作物ゆえ、14年以降の水不足の時期には、稲の作付けはできなかった。22年にロシアが北クリミア水路を奪うと灌漑が復活し、稲作も再開された(しかも初年度は農業用水がタダという大盤振る舞い!)。こうしてクリミアは22年、8年振りに米を収穫することができたのである。

15) クリミアで利用される水のうち、圧倒的に多いのは農業用水であり、家庭用の割合は10%あまりのようである。したがって、北クリミア水路が止まっても、生活用水程度はクリミアの水源で賄うことができ、住民の生活に大きな影響はないようだ。しかし、水路が復活しない限り、農業用水は先細っていく、特に稲作などは絶望的となる。

16) もしもロシア側がダムを爆破したのだとしたら、こうした犠牲を厭わない、なりふり構わぬ決死の作戦だったことになる。あるいは、プーチン政権にありがちな、地元行政や農業部門とは何の調整もなく、特定部門の独走のような形で強行されたのだろうか。現時点では、ダムがどの程度崩壊しているのかも、確認するべきでない。ただ、部分的修復は不可能であり、新しく建設する必要があるのではないかとの声も一部に出ている。

17) ウクライナの専門家によれば、ダムおよび水力発電所を新規に建設するとすれば、少なくとも5年間かかり、10億ドル以上の費用を要するということである。しかも、貯水池を再び満杯にするのに、さらに3年かかるという。そして、言うまでもなく、戦火が止まなければ、ダムの建設工事に着手することもできない。十分な農業用水が供給されない期間が長期化すれば、豊かな農業地帯だったウクライナ南部が「砂漠化」までは行かなくとも、不毛の大地と化す恐れは決して否定できない。

1) このウクライナ戦争ウオッチで紹介してきたインターネット情報は、要約してボリュームを半分程度以下に縮めるようにしてきた。しかし服部教授の投稿は、カホフカダム破壊の影響を最も大切な農業という視点から掘り下げていて、貴重で興味深い内容であり、日本では詳しく報道されることも少なかったようなので、ほとんど全体を、ごく一部に手を入れただけで、紹介させて頂く。

3) 戦争は人命とお金を消費してさらに物を破壊する愚かな行為なのであるが、一帯を豊かにしようとする連が始めて半世紀以上営々と積み重ねられてきた努力を、あっさりとして無にするロシアの行為には怒りため息が尽きない。ロシアはやはり、ウクライナという国家の存在を消し去ろうとしているのか？ あるいは、p5の6/13記事のようにこの戦争に勝てないことは重々知っているが、代金なしには負けたくない、と言っているのか？

5) 水没地域では足元に水がたぐさみ溢れているのに、清潔な飲み水に事欠く。コレラなどの伝染病の可能性も高まる。ゼレンスキー大統領が非難していたように、「環境を破壊する巨大なテロ」である。

7) 黒海経由の穀物輸出に関して、国連・トルコ仲介で22年8月に期限付きで再開され(その2のp9)、その期限が来るたびに更新されてはきたが、ロシアは我々に不利な内容だ(ロシア輸出量が少ない)とごねていた(7/20時点で合意停止)。カホフカダム関連の灌漑施設を機能不全にすることで、ロシアは再び、この地域からの穀物に依存している国を人質にとって、自分の立場を強めようとしているのであろうか？ また、キーウはドニプロ川の水運で発達してきた街でもあり、水運の重要性は時代の流れとともに低下しているとは言え、最下流に位置するカホフカダムの開門使用不能(開門を操作するためには多量の水を必要とする)は、ウクライナの戦後復興の足枷になるに違いない。

11) 水路の入り口には水位を調節するためのゲートがあるはずだが、ゲート下端以下に貯水池側の水位が下がれば、お手上げ。戦後の取りあえぬ復旧としてはポンプの使用か〜電力が必要になる。

12) 2014年のクリミア併合後には、ロシア本国からの援助が手厚かったのでクリミアの人々は最初は喜んだが、そのうち水不足が深刻になってきて、ウクライナのままの方が良かったと不満に転じたという話を、以前に読んだ記憶がある。

16) 独裁者の権威が強くなり過ぎて皆のチェックが働かなくなり、不幸な選択がなされるということなのであろう。

2. ロシアと他国の関係

2.1 対中国

23.46 ロシアが民主化したら困る中国〜習近平訪露で結束演出(西村六善/元外務省欧亜局長, Wedge ONLINE)

1) 習近平主席は23年3月20日より3日間ロシアを訪問した。戦況がロシアに不利なので、中国は心配だったに違いない。これに対し米国は中国に、殺傷兵器をロシアに提供するなど警告している。習とプーチンによる会談で見せた結束は長く続くのか？ ロシアは国際法を破って独立国を侵略した無法者だ。中国が普通の法治国家であればロシアを非難すべきだ。しかしプーチンが負ければロシアは民主化する可能性がある。中国にとってそうなるのは困るので、プーチンにしっかりネジを締めに行ったというのが本当のところだろう。

2) この中露首脳会談がどれ程成功したのかは今後の展開次第だが、中国は今回得点を稼いだことになっている。それは「世界を変えようとする中国の国家的運動」にロシアが乗ったからだ。22年10月の第20回中国共産党大会では、中国は西側民主勢力に対抗して行く姿勢を鮮明にし、その関係でグローバルサウスに勢力圏を築くという方針を決めた。だが、その後の流れを見ると中国外交は更に一段とギアを上げて、「欧米中心に偏った国際関係の基本を改編する」という動きに変わって行ったようだ。

3) この「国際関係の基本を改編」しようとする中国の動きを大規模に報じたのは私の知る限り、昨年10月の英国のThe Economist誌(2022年10月15-21日号)である。

「中国が欲する世界」と題するこの特集号は、「中国は今や、他国つまり欧米社会が作った世界秩序を変更し、破壊するつもりだ」と警告していた。同誌は中国の行動を詳しく分析し、中国は「より欧米中心でない世界」、「別の世界秩序」(Alternative World Order)というべきものを目指していると論じたのだ。今回の習訪露で、どうやらこの中国の

立場をロシアが支持したようだ。これが今回の首脳会議の一つの重要なポイントだったらしい。

4) 米国Politico誌の中国専門家であるStuart Lau記者のツイートによれば、習が帰国のためにクレムリンを車で出発する時、習はプーチンに「われわれ両国は100年この方見たことが無い地球大の大変動を起こそうとしている」と述べて同氏にエールを送った由だ。中国の視点からすると今回の習のロシア訪問は大成功だったといえるのだろう。

5) 中国が実現しようとする「別の世界秩序」とは、23年3月15日に行われた中国共産党・世界政党上層部対話で、習が説明した「世界に向けて、グローバル発展とグローバル安全保障に続き、グローバル文明でイニシアティブを発揮し、世界秩序を構成する」という方針のことである。中国が新しい時代の国際社会に発展と安全保障を提供し、進歩させた文明が重要な「国際公共財」という位置づけだ。中国は国際法の関係でも大胆な変更提案をしている。エール大学の専門家の分析では、①国際法の新展開、②国際関係分野での法の支配、③主要分野での国際準則、④国際司法上の協力、⑤国際紛争解決のメカニズム、等において、根本的な改変を提案するものらしい。

6) はてさて、プーチンのロシアが今回、中国との意見の一致を見せたとしても、将来ともロシアが中国と共に新国際関係の形成に協力して行くとは限らない。もしモスクワで政権交代が起きれば、事態は大きく変わる。民主勢力が政権を掌握したらロシアは全く違った国になる。ロシアが民主主義の方向に動き出すと習の目論見は崩壊することになる。中国自身もこのままではないかもしれない。その上、別の問題もある。今のような共産党1党独裁の中国が今後10年、20年とあの国を支配するという想定は正しいのだろうか？

5) 中国が目指そうとしている新たな国際秩序、その建設方法などは、「その4のp13」で紹介したとおりなのであろう。中国基準の新秩序ということになり、我々には受け入れ難い基準である。

進化させたグローバル文明？・・・世界に大迷惑をかけたコロナ感染症の責任が重いはずなのに、WHOの疫学調査も非協力でごまかそうとし、説明を求めた国(オーストラリア)には貿易制限で回答するような国、表現の自由がない一党独裁政治体制に、誰が魅力を感じるのだろうか？

6) ロシアの民主化は「その4のp7」でも紹介したが、本当に可能だろうか？

23.4.11 武器供与で習近平を怒らせたプーチンの誤算 (吉田成之/新聞通信調査会理事、共同通信ロシア・東欧ファイル編集長、東洋経済ONLINE)

1) 習近平主席の23年3月のロシア訪問時に、プーチンは大きな外交上のミスをした。外交筋によると、プーチンは会談で再三、武器供与を習に求めて習に不快な思いをさせたという。もともと事務方の事前協議で、中国側は供与を求めたロシア側に対し、明確に拒否の方針を伝えていた。それにもかかわらず、プーチンが面と向かって供与を求めたことで習が立腹する原因になったという。

2) さらに習のメンツをつぶすことも起きた。首脳会談の結果として署名した共同声明で、国外に核兵器を配備しないことなどを明記したにもかかわらず、その数日後にベラルーシへの戦術核配備をプーチンが発表した。

3) 今回の共同声明で中露は戦略的協力と包括的パートナー関係深化をうたったが、同外交筋は「中ロが準同盟関係を維持しているのはアメリカをにらんだ太平洋地域での話。ウクライナ問題をめぐっては、この1年間で隙間風が吹いている」と指摘する。

2) 中国の武器供与拒否に対するロシア側の露骨な不快感表明と見られている。

3) その後6月に入って、ロシアはカホフカダムを破壊して大洪水を引き起こした。このような暴挙、環境破壊テロに走るロシアが行ってきたウクライナ侵略を、情形的に応援してきた中国もやや反省の気持ちを持ち始めたに違いない。さらには、プーチン体制の盤石さ神話に大なる疑問符をつけたプリゴジンの反乱もあった。中国のロシアに対する姿勢はますます距離を置いたものになると、個人的には期待している。

23.6.12 中国はロシアに協力するふりをしつつ裏切るか～中央アジア争奪をめぐる暗闘 (六辻彰二/国際政治学者、Newsweek)

1) 中央アジア(カザフスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタン)はロシアの縄張りとしてきたが、もともと中国にとっても関心の高い地域だった。中国はロシアと完全に手を切ることは想定していないが、その一方でロシアと一蓮托生するつもりでもないと思えない。冷徹に自国の利益を追求するであろう。今回述べたいのは次の3つのポイントである。

・ロシアの'裏庭'中央アジアに中国は進出を加速している。
・これは「ウクライナに忙殺されるロシアに代わって中央アジアの結束を固めてあげるため」というより、ロシアの縄張りに本格的に切り込むためとみられる。

・この地域は中国にとって死活的な重要性を増しており、米露が身動きしにくい間隙をついてアクションを起こすのは中国の歴史的な常套手段でもある。

2) 「裏切り」を思わせる4つの理由は、G7広島サミットの開催日と同じ5月19日、中国政府が中央アジア5カ国の首脳を招いた国際会議C5+1を西安で開き、その共同宣

言で「先進国が古臭い冷戦型の思考に陥っている」と批判したうえで、先進国主導の国際秩序と異なる秩序の必要を強調した点にある。この場で中国政府はインフラ建設などのために38億ドルの資金協力を約束した他、貿易や投資のさらなる活発化で合意した。中央アジア5カ国は1991年のソビエト連邦崩壊にともなって独立したが、その後もロシアの影響が強い。そのためC5+1西安サミットを「先進国vs中露」の構図でとらえ、「ウクライナ戦争に忙殺されるロシアに代わって中国が中央アジアの結束を固めること」が目的だったと理解することは可能だ。

3) しかし、別の捉え方もできる。「ロシアがウクライナ戦争で手一杯の隙に、ロシアの『裏庭』に中国の影響力を伸ばすこと」が主な目的だったという見方だ。そのように考えられる理由は主に4つある。

4) まず理由の1番目として、中央アジアではロシアへの警戒感が表面化している。中央アジアはロシア帝国の時代に編入された。それ以来ロシアの縄張りであり、それはウクライナ侵攻後も同じだ。例えば昨年、中央アジアで経済規模が最大のカザフスタンでは世論調査で、ロシアとの関係強化を支持した回答者は88%にのぼった。ただし、その一方でカザフ政府はウクライナ侵攻にしばしば否定的な反応を示してきた。

昨年9月、ルハンスク州やドネツク州などでロシア編入の賛否を問う住民投票が、両州を実効支配するロシアのテコ入れで行われ、賛成多数の結果が発表された。これを先進国は揃って批判したが、カザフ政府は住民投票そのものを認めないと表明した。こうした反応は極めて稀だ。そこにはロシアの植民地主義的な態度への疑念があるとみてよい。プーチンは2014年8月、「カザフ人には国家がなかった」と発言した。要するに「18世紀のロシア帝国による編入がカザフ人に近代国家の観念をもたらした、だから現在の国境線にたいした意味はない」と言いたかったのだらう。

5) 歴史的に正しいかどうかはさておき、この主旨をあえて強調すれば「場合によってはカザフの領土をロシアが取り戻すこともあり得る」となる。この論理が成立するなら、アフリカ大陸もイギリスやフランスのものにできる。プーチンのこの主張はウクライナ侵攻に関してもよく聞く。プーチンはウクライナ国家の起源をロシア人入植に求め、「ウクライナという国はもともとなかった」、「歴史の誤りを正す」として侵攻を正当化してきた。

6) とすると、ウクライナ侵攻はカザフ政府にとって自国の領土や主権にも関わる問題といえる。カザフ政府は「西と東、グローバルノースとグローバルサウスとの架け橋になる」と強調しているが、これはロシアと一定の距離を保ちつつ、ロシアとの摩擦を必要以上に高めないためとみられる。カザフほど鮮明ではなくとも、ウズベキスタンやキル

ギスタンも「懸念」を表明し、ウクライナ侵攻とは距離を置いている。

7) 理由の2番目は、中国から見た中央アジアがこれまで以上に重要度を増していることだ。この地はもともと中国にとって関心の高い地域だ。中央アジアと接する中国の新疆ウイグル自治区には、中華人民共和国が建国を宣言した1949年以降、生産建設兵団という名の屯田兵が送り込まれた。その任務はこの地の開拓、少数民族の管理、そして当時ソ連の一部だった中央アジアとの国境警備にあった。つまり、表面的なアピールとは裏腹に、中国は歴史的にソ連／ロシアへの警戒心を抱き続けてきた。それは今も基本的に同じで、中央アジアを取り込めれば、その向こうにあるロシアとの間に緩衝材を挟む効果が期待できる。

8) これに加えて、天然ガスの産出国が中央アジアに多いことも、中国にとっての重要度を高めている。2022年の中央アジア5カ国と中国の間の貿易額は700億ドルにのぼり、このうち最大の経済規模をもつカザフスタンとの間のそれは310億ドルを占めた。急速に高まる中国の存在感に、現地では反中感情も表面化しており、米シンクタンク、オクス協会によると、2018年1月1日から2021年6月30日までの間にカザフで反中デモは241回発生した。しかし、それでも西安サミットで習近平は中央アジアと中国の間のパイプライン建設をさらに加速させると強調した。

9) そこには中央アジアだけでなく中東への関心も含まれているとみた方がよい。今年3月、それまで国交を断絶していたサウジアラビアとイランは中国の仲介で外交関係を修復した。これによって中東における中国の存在感はかつてなく高まった。ところで、中東と中国をつなぐ陸路のルート上には中央アジアがある。つまり、中東からパイプラインを敷設し、エネルギー安全保障を強化する場合、中央アジアを取り込むことが中国にとって死活的な重要性をもつのだ。

10) 理由の3番目の理由は、中央アジアへのアプローチ強化がロシアのいないC5+1で打ち出されたことだ。中国とロシア、そして中央アジア各国がいずれも参加する組織としては上海協力機構(SCO)がある。しかし、このタイミングのSCOで中国がアプローチ強化を打ち出せば、ロシアの露骨な警戒を招くだけでなく、カザフなどに「中露が一体となって締め付けを強めようとしている」と思わせかねない。その場合、カザフなどはむしろ先進国への接近に舵を切る可能性も大きい。

11) むしろ、ロシアがメンバーではないC5+1で中国がアプローチ強化を打ち出したことは、カザフなどに「ロシア以外の大きな選択肢」として中国を意識させやすいといえる。これがロシア政府の神経を苛立たせることは疑いないが、かといって表向きは文句を言うこともできない。

12) もっとも、こうしたことは初めてではない。習近平の代名詞ともいえる「一帯一路」構想は2013年に発表されたが、それはカザフスタン訪問中のことだった。ユーラシア大陸からアフリカ大陸までをカバーする中国主導の経済秩序の構想は、ロシアだけでなくその縄張りまでも含まれている。これに対して、プーチンはその翌2014年、旧ソ連圏の経済協力を目指す「ユーラシア経済連合(EAEU)」の創設を発表し、さらにその翌2015年にはEAEUを「一帯一路」と結びつけることを提案した。この顛末にもやはり、表向きの中露友好とは裏腹の、中央アジアをめぐる静かな罅縫い合いを見出せる。

13) 理由の4番目は、タイミングの問題だ。中国による中央アジア進出の加速はロシアだけでなくアメリカからも強い警戒を招きやすい。しかし、米露はウクライナ侵攻で身動きが取れない。冷戦期以来、中国は世界の目が一ヶ所に集中しているタイミングで重大なアクションを起こす傾向がある。

14) 1962年10月、中国は領有権争いを抱えるインドのアクサイチンなどに軍事侵攻して実効支配するに至った。これはキューバ危機で人類が核戦争の淵に立ち、米ソがその解決に忙殺されていたタイミングだった。また、「中国のアフリカ進出」は今やよく知られるテーマだが、その土台ともいえる中国アフリカ協力フォーラム(FOCAC)は1999年5月、中国政府とマダガスカル政府の間でフォーラム創設に関する合意が形成されたことをきっかけにスタートした。これはちょうど東欧コソボで発生した軍事衝突により、この地を縄張りにしてきたロシアと欧米の対立がエスカレートしていたタイミングだった。

15) つまり、長年温めてきた計画を人目をひきにくいタイミングで実行するのが中国のパターンといえる。だとすると、ロシアの「裏庭」に背後から手を伸ばそうとする習にとつて、ウクライナ戦争は世界の目を届きにくくする煙幕ともいえるだろう。これが中国の期待通りに進むなら、その意味でもウクライナ侵攻は大きな歴史の節目になるかもしれないのだ。

1) この六辻さんの論考もほぼ全文を紹介した。さて、「スタン」とは、ペルシアの文化的影響が強い中央アジアから中東にかけて、国や地方の名称を形成する語尾(地名接尾辞)として用いられるペルシア語由来の言葉である(Wikipedia)。

2) 西安で開かれた「C5+1」サミットでは、中国の習主席が中華皇帝のような得意満面の笑みを浮かべて記念写真の中央に納まり、朝貢国家の代表に拝謁させているような雰囲気があった。もちろん、ロシアのプーチン大統領が彼らを招く時にも、同様のセッティングをする。

4) このあたりの歴史は、司馬遼太郎著『ロシアについて〜北方の原型』(文藝春秋)に描かれている。

7) 新疆ウイグル自治区におけるウイグル人への弾圧・人権侵害は、中国〜西側諸国の鋭い対立点であり続けている。

15) 中国外交のしたたかさを如実に示している。王朝が何度替わっても、広大な領域の多くの(民族数でも人口でも)人々を支配し続け、時に周辺勢力との戦争を繰り返してきた2200年以上の歴史が骨の髄まで教え込んだものであろう。

23.7.5 習主席は3月下旬の訪露時に「核兵器使用に反対」とプーチン大統領に直接に伝達していた(英国フィナンシャル・タイムズ紙)

西側・中国側の当局者の話として伝えた。ロシアのペスコフ報道官は、「確認できない。交渉の要点は両首脳の声明に明記されているとおおりだ」と述べた。

2.2 対ベラルーシ

23.4.13 ベラルーシのルカシェンコ大統領とプーチン大統領の腐れ縁、しかし核兵器については？(服部倫卓/北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授 Wedge ONLINE)

1) 今年に入ってから、ベラルーシの独裁者ルカシェンコ氏による外交攻勢が目立っている。なお、欧米諸国はもはや同氏を正式な国家指導者とは認めていない。

2) ルカシェンコとプーチンの関係性を長年ウオッチしてきた筆者は、両者が一枚岩という捉え方をしてはほららないと思っている。荒唐無稽な話ながら、1994年にベラルーシ大統領に就任したルカシェンコは、ロシアと統一国家を築き、最終的に自分がクレムリンの玉座に収まることを夢見ていた。当時のロシアのエリツィン政権にとつても、常にロシアになびいてくるベラルーシの存在は都合が良く、場合によってはエリツィン政権の延命工作に使えるかもしれないという計算も働いた。新国家を作った体にしてエリツィンの新たな任期を開始するといふ案である。両者の思惑が交錯し、ロシア・ベラルーシ間で「連合国家」を創設する旨の条約が結ばれることになった。

3) しかし、1999年8月にプーチンが首相に就任すると、状況が一変する。プーチンがエリツィンの頼りがいのある後継者として浮上することで、政権延命云々は必要なくなり、ロシアの国家体制を脅かしかねない大胆な統合案は無用の長物となった。ロシア側は、他ならぬプーチン首相が陣頭指揮を執り、条約案を骨抜きにした。結局、同年12月にエリツィン・ルカシェンコ間で条約は調印されたものの、中身はすっかり空文の羅列と化していた。この条約が成立した直後、99年の大晦日にエリツィンは電撃辞任し、ロシアの最高権力はプーチンに移行した。プーチンは2000年5月に正式に大統領に就任し、以降本格政

権を築いていく。ルカシェンコがクレムリンの玉座に納まるなど、夢のまた夢となった。

4) これを境に、ルカシェンコはクレムリンのトップに立つ野望を封印し、ベラルーシという一国一城の主として生きることを決意する。ただし、資源もない小国のベラルーシが、自力で食べていくのは至難である。そこで、ルカシェンコはロシアの内と外を都合良く使い分ける戦法を編み出した。ロシアがベラルーシに供給する天然ガスや石油の価格については、「わが国は統合パートナーだ」として、ロシア国内と同じ格安水準を要求する。しかし、ロシア側が共通ルール受け入れをベラルーシに迫ると、「それはわが国の主権事項だ」として拒絶する。絵に描いたようなダブルスタンダードだ。

5) こうした路線はロシア側を苛立たせ、両国間でしばしば波風が立った。「クレムリンがルカシェンコを引きずり下ろし、より従順な後継者にすげ替えるのではないか」といった憶測も、しばしば語られた。しかし、「欧州最後の独裁者」の異名を持つルカシェンコは、ベラルーシが欧米に接近しない担保になる。ロシア側は、狡猾に立ち回るルカシェンコを忌々しく思いながらも、安価なエネルギー供給などを通じ、年間100億ドルとも言われる援助をベラルーシに提供して、ルカシェンコ体制を扶養してきたのである。

6) ところが、2018年暮れになって、ロシア側は突如として、連合国家創設条約の最大限の履行をベラルーシに求めるようになる。上述のとおり、1999年の条約はプーチンが主導して骨抜きにした。確かに、将来的に両国が合意すれば、連合国家の憲法、議会、単一通貨等を導入する可能性があるとはされていたが、現実にはその機は熟していなかった。にもかかわらず、ロシアが唐突に「最大限の統合に応じなければ、もうベラルーシを支援しない」と迫ったため、これはロシアへの編入をベラルーシに迫る「最後通牒」だとして物議を醸した。この背景にはやはり、14年のウクライナ政変を受け、ロシアが自らの勢力圏維持に危機感を抱いたことがあっただろう。そこで、20年前にはあえて死産とした連合国家に、新たに命を吹き込み、ベラルーシをロシア圏に固定するために活用しようとしたものと見られる。

7) 統合を渋るベラルーシ側に、ロシアからの支援が細ったこともあり、20年8月の大統領選でルカシェンコは大苦戦した。「ルカシェンコが8割得票し圧勝」とする現実離れた公式発表に憤ったベラルーシ国民は、脱ルカシェンコを掲げて立ち上がった。1994年の政権発足以来、最大の窮地に陥ったルカシェンコは、プーチンから物心両面の支援を取り付けて、どうにかピンチを切り抜けた。ただ、これですっかりロシアの言いなりになり、要求されるがまま全面的な国家統合に応じるかと思われたが、そこは

やはり「食えない男」ルカシェンコであった。その後もロシアからの統合要求を、のらりくらりとはぐらかしている。

8) また、ロシアも22年2月にウクライナへの軍事侵攻を開始したため、目下のところベラルーシに対し、経済・国家統合よりも、軍事面での協力を優先的に求めている模様である。それでも、本年2月には、クレムリンのベラルーシ併合計画なる秘密文書が流出し、ロシアは中長期的な構えながらやはりベラルーシを飲み込もうとしているとの観測が再び強まった。

9) 3月25日にプーチン大統領が表明したベラルーシへの戦術核配備の決定も、ルカシェンコとの容易ならざる関係性を考慮に入れると、違う景色が見えてくる。筆者は、当然のことながら、プーチンが言っているのは、ベラルーシ領に展開するロシア空軍機用に戦術核を配備するということなのだろうと理解した。これならば、グレーゾーンではあるが、核不拡散を遵守していると強弁できる。

ところが、ルカシェンコの言動からは、ベラルーシ軍に戦術核を導入し、自らが核のボタンを握る気満々であることが見て取れたのである。筆者が最も信頼するベラルーシ人政治学者であるV.カルバレヴィチ氏も最近、そのあたりの矛盾について論じている。プーチンが3月25日に「ベラルーシに核兵器を引き渡すわけではなく、ロシアの核兵器をベラルーシ領に配備するだけ」と発言したのに対し、ルカシェンコは3月31日の教書演説で「これはわが国の核兵器であり、わが国の領内に置かれた兵器はすべてわが国が管理する」と述べ、根本的な隔たりが露呈した。

10) 率直に私見を申し上げれば、プーチンがルカシェンコのような相手に核のボタンを委ねるなど、ありえないことである。そんなことをしたら、事の成り行き次第では、ルカシェンコが核を使ってロシアを恫喝するような事態も、起きない保証はない。国際社会を騒がせたプーチンによるベラルーシへの戦術核配備発言であったが、ルカシェンコ側との調整が難航し、実現しない可能性もありそうである。

1) 服部教授のこの論考もほぼ全てを紹介した。23年6月のワグネルのプリゴジン反乱の終息に対してルカシェンコは一定の役割を果たして、プーチンに貸しを作ったようだ。戦闘能力が高いと言われているワグネル部隊の扱い如何によるが、プーチン～プリゴジン関係はまだ流動性的だと思う。

6) プーチンはウクライナ侵略も念頭に、ベラルーシとの距離を縮めておこうとしたのかな？

8) ルカシェンコはベラルーシ領土を、露軍のウクライナ攻撃の拠点にすることは許しているが、プーチンの直接参戦要請は断わり続けている。ルカシェンコは5月には体調不良を思わせるような場面もあった。万が一、ルカシェンコが倒れるようなことがあ

れば(ロシアお得意の暗殺だってあるだろう)、その後継者がプーチンに負けて直接参戦に傾くかも知れない。また、ベラルーシ国内に亡命しているかのようなワグネル部隊を、ウクライナ向けに投入するかも知れない。これはウクライナ軍の苦労を増すだけに、願ひ下げだ。

10) 報道されるところによると(露側発表)、ベラルーシ国内での核兵器保管施設は完成して、搬入が始まっているようだ。そしてルカシェンコは自ら先制攻撃はしないが、ベラルーシが攻撃を受けた時にはためらわない、と言っている。

3. その他の情報

23.5.20 G7首脳が原爆資料館で記帳したメッセージ

広島で開催されたサミットであるし、G7首脳がここを訪れたことも初めてであるから(2016年5月にオバマ大統領は来ているが)、ここに記して忘れないようにしておきたい。また、このサミットでの大きな議題の一つがウクライナ戦争であるし、ゼレンスキー大統領もサプライズ的に対面参加できた。それを実現した日本の外交力は大きなものだろううれしかったし、プーチン大統領や習主席には予期せぬショックになったであろう。中露にやや付度している感のあるフランスが、政府専用機をゼレンスキーの足として提供したことも良かった。

政府発表の、G7広島サミット各国首脳の記帳内容は以下のとおり(仮訳は外務省による)。

【岸田総理大臣】

「歴史に残るG7サミットの機会に議長として各国首脳と共に「核兵器のない世界」をめざすためにここに集う」

【フランス・マクロン大統領】

「Avec émotion et compassion, il nous appartient de contribuer au devoir de mémoire des victimes d'Hiroshima et d'agir en faveur de la paix, seul combat qui mérite d'être mené.」

「感情と共感の念をもって広島で犠牲となった方々を追悼する責務に貢献し、平和のために行動することだけが、私たちに課せられた使命です」

【アメリカ・バイデン大統領】

「May the stories of this Museum remind us all of our obligations to build a future of peace. Together-let us continue to make progress toward the day when we can finally and forever rid the world of nuclear weapons. Keep the faith!」

「この資料館で語られる物語が、平和な未来を築くことへの私たち全員の義務を思い出させてくれますように。世界から核兵器を最終的に、そして、永久になくせる日に向けて、共に進んでいきましょう。信念を貫きましょう！」

【カナダ・トルドー首相】

「Canada pays solemn tribute to the many lives lost, the

unspeakable grief of the Hibakusha, and the immense suffering of the people of Hiroshima and Nagasaki.Votre histoire restera à jamais gravée dans notre conscience collective.」

「多数の犠牲にひなつた命、被爆者の声にひなつた悲嘆、広島と長崎の人々の計り知れない苦悩に、カナダは厳粛なる弔慰と敬意を表します。貴方の体験は我々の心に永遠に刻まれることでしょう」

【ドイツ・ショルツ首相】

「Dieser Ort erinnert an unfassbares Leid. Heute erneuern wir hier gemeinsam mit unseren Partnern das Versprechen, Frieden und Freiheit mit aller Entschlossenheit zu schützen. Ein nuklearer Krieg darf nie wieder geführt werden.」

「この場所は、想像を絶する苦しみを思い起こさせる。私たちは今日ここでパートナーたちとともに、この上なく強い決意で平和と自由を守っていくとの約束を新たににする。核の戦争は決して再び繰り返されてはならない」

【イタリア・メローニ首相】

「Oggi ci fermiamo e restiamo in preghiera. Oggi ricordiamo che l'oscurità non ha avuto la meglio. Oggi ricordiamo il passato per costruire, insieme, un futuro di speranza.」

「本日、少し立ち止まり、祈りを捧げましょう。本日、闇が凌駕するものは何もないということを覚えておきましょう。本日、過去を思い起こして、希望に満ちた未来を共に描きましょう」

【イギリス・スナク首相】

「Shakespeare tells us to “give sorrow words”. Yet language fails in the light of the bomb's flash. No words can describe the horror and suffering of the people of Hiroshima and Nagasaki. But what we can say, with all our hearts, and all our souls, is no more.」

「シェイクスピアは、『悲しみを言葉に出せ』と説いている。しかし、原爆の閃光に照らされ、言葉は通じない。広島と長崎の人々の恐怖と苦しみは、どんな言葉を用いても言い表すことができない。しかし、私たちが、心と魂を込めて言えることは、繰り返さないということだ」

【EU・ミシェル欧州理事会議長】

「An immense tragedy took place here almost 80 years ago. It reminds us what we—as G7—are defending. And why we are defending it. Peace and freedom. Because it's what all human beings want most.」

「80年近く前、この地は大きな悲劇に見舞われました。このことは、われわれG7が実際何を守ろうとしているのか、なぜそれを守りたいのか、改めて思い起こさせます。それは、平和と自由。なぜならば、それらは人類が最も渴望するものだからです」

【EU・フォンデアライエン欧州委員会委員長】

「What happened in Hiroshima is still today haunting humanity. It is a stark reminder of the terrible cost of war – and our everlasting

duty to protect and preserve peace.」

「広島で起きたことは、今なお人類を苦しめています。これは戦争がもたらす重い代償と、平和を守り堅持するというわれわれの終わりのなき義務をはっきりと思い起こさせるものです」

23. 5. 29 「プーチンを揶揄」「ロシア軍をナチスドイツになぞらえ」…ロシアのジョーク「アネグドート」から読み解く本当の民意 (名越健郎/拓殖大学特任教授、デイリー新潮)

ウクライナ戦争が始まって約460日。対独戦勝記念日に勇ましい演説をぶったプーチンだが、国内では終わりのなき戦いに不満が鬱積している。高止まりする支持率の陰でロシアン・ジョークに表れる「本当の民意」を、拓殖大学の名越健郎・特任教授がレポートする。ロシアにはアネグドートと呼ばれる、政治小話の伝統がある。権力を嘲笑し、生活の不満を皮肉るアネグドートは、旧ソ連時代に異常な発展を遂げた。厳しい社会主義統制下、庶民はアネグドートで憂さを晴らし、欲求不満を解消したものだ。

ソ連時代のすぐれた作品を紹介すると――。

1) ソ連の軍需工場で、3人の労働者が秘密警察に逮捕された。一人は時間より30分早く出勤したためにスパイの疑いで。一人は時間より30分遅く出勤したためにサボタージュの疑いで。一人は時間通りに出勤したために外国製腕時計を不正に入手した疑いで。

今のロシアでは軍の名誉を失墜させる行為には最高15年の刑を科すとする侵攻後に採択された刑法があるので、アネグドートを発表するのも覚悟が必要だ。

2) プーチン大統領が軍需工場を視察した。工場長が説明した。「前線の兵士に必要な物資を届けるため、毎日休みなしにフル稼働しています」

「それで何を作っているのか？」「棺桶です」。

3) プーチン大統領が突然発作に襲われ、10年間意識を失った。病院で目が覚めた大統領は一人でモスクワのバーに出掛け、バーテンダーに尋ねた。「クリミアは今もわれわれのものなのか？」「その通りです」

「ドンバスもそうか？」「もちろんです。キエフもです」

「それは良かった。……ところで、勘定はいくらだ？」

「100フリブナ(ウクライナ通貨)です」。

4) ロシア政府が遂にNATO加盟を申請した。ウクライナから自国の安全を守るためだ。

5) ロシアの将軍が戦場で意識不明に陥り、1年後に回復した。側近の将校が話しかけた。

「将軍、大統領がウクライナ侵攻を命令し、実質的にNATOとの戦いになり、これまでに10万人が戦死し、戦闘車両5千両、軍艦や戦闘機多数を失いました」。

「それは恐ろしい。それでNATOの損害は？」「NATO軍はまだ介入していません」。

6) プーチン大統領の国民とのテレビ対話で、シングルマザーが質問に立った。「私には2人の息子がいます。子育てで国に何を期待してよいでしょう？」

「2通の召集令状だ」。

7) 父親が、軍に動員された息子に電話した。

「キエフは確保したのか？」「まだです」

「ハリコフは？」「まだです」

「では、ウクライナで何を確保したのだ？」「テレビ、冷蔵庫、高級ワイン、パソコン、靴下、下着……」。

7) 問＝ロシア軍のウクライナ侵攻を内心、喜んでいる国はどこか？ 答＝ドイツだ。ナチスの記憶が薄れるからだ。

8) ドイツ人一家の会話：息子「ハシ、なんでこんなに寒いのか？」 父「ロシアがウクライナを攻撃したので、ロシアに制裁を科したからだ」

息子「なぜ制裁したのか？」 父「ロシアを苦しめるためだ」

息子「僕たちはロシア人なの？」。

9) プーチン大統領が「核戦争が起これば、われわれは殉教者として天国に行く」と述べた。これを聞いた天国の神は、NATO加盟を申請した。ロシア人1億4千万人が一斉に亡くなり、天国に送られた。天国の管理人が「これほど人が多いと、群衆をまとめる指導者が必要だ。誰がいいか？」と尋ねると、群衆から「プーチン、プーチン」のシュプレヒコールが沸き上がった。

管理人が言った、「プーチンはここにいない。彼は地獄に送られたはずだ」。

10) 問＝ピョートル大帝とプーチン大統領の共通点は何か？ 答＝ともにロシアを19世紀に導こうとしている。

11) 米国の対露経済制裁に伴い、マクドナルドなどのファストフード、コカ・コーラ、ペプシコーラ、アップルやフェイスブック、ツイッターがロシアから撤退した。医師がコメントした。

「ロシア人はこれで、心身ともに健康になれる」。

ロシア人と同じスラブ系のウクライナにも、政治ジョークの伝統がある。首都キーウのお笑い劇場ではロシアを揶揄するアネグドートがあふれ、笑いが絶えない。

12) 昨年11月、ロシア軍がウクライナ南部のヘルソン市から撤退したが、プーチン大統領がショイグ国防相を叱責した。「なぜヘルソンから撤退するのだ？」

「ネオナチからウクライナを解放せよとのあなたの命令に従ったのですが……」。

13) プーチン大統領が占星術師に占ってもらった。

「1年後の今、私はどこにいるか？」

「あなたはキエフにいます。戦争は終わり、あなたの乗る車の周辺は歓声を上げる市民であふれています」

「私も彼らに手を振っているのか？」
「それはできません。棺(ひつぎ)は密閉されています」。
14) プーチン大統領が占星術師に占ってもらった。
「私はいつ死ぬのか?」「あなたはウクライナの祝日に死ぬこととなります」
「祝日はいつだ?」「あなたの命日がウクライナの祝日です」。
15) 夜中の3時、ロシア大統領公邸で執事がプーチン大統領を起こした。
「夜分に失礼します。ウクライナ側が降伏について大統領と交渉したいそうです」「遂にきたか。電話を回してくれ」。
「それには及びません。武装したウクライナ兵がドアの外で待っています」。

おわりに

3か月半ぶりにウクライナ戦争ウオッチを書いてみました。カホフカダム破壊という、私の専門であった土木工学上もショッキングな事態が発生したからです。

戦略的・戦術的手段としてのダム破壊は、今回紹介したように過去にもあり、それを英米軍が実行したこともあります。戦争が野蛮な営みであることは間違いのないけれど、その野蛮さと一般市民の犠牲をなるべく少なくする方向に軍事は進化してきたと、元防衛大教授は理解していました。でも、そうではなかったのですね…。ロシアは国際法を破り(侵略戦争を始めたことがその最悪)、戦争のマナーを約1世紀も前に引き戻してしまいました。兵器の性能や偵察・情報分析・通信などの能力が高くなり、ミサイルやドローンなども登場して殺傷能力が上がっているなかで、これらは悲劇的です。

ウクライナ軍の反転攻勢は6月上旬に開始されたようですが、ロシア軍がその本領を發揮する防御戦の重厚さに苦戦を強いられている、と報道されています。西側の新型戦車が供与されたからと言って、それは無敵ではなく、破壊され得るのです。人々は死に続いています。

慶應義塾大学の鶴岡路人准教授は、Daily新潮にこう投稿していました;

「命をかけても守らなければならないものがある。ウクライナの抵抗は、これに尽きるのだろう。つまり、ここで抵抗しなければ祖国が無くなってしまふ。将来が無くなってしまふ。しかも、このことが、兵士のみならず一般市民にも広く共有されているようにみえることが、今回のウクライナの抵抗を支えている(その2のp5、その3のp14を参照)……。

ロシア軍に降伏したところで命の保証はないし、人道回廊という甘い言葉のもとでおこなわれる移動は、たとえ本当に避難できたとしても、それは強制退去・強制移住で

あり、後にした故郷は破壊されるのである。2022年4月以降に明らかとなった首都キーウ近郊のブチャやボロディアンカにおける市民の虐殺は、ロシア軍による占領の加害の大きさを示していた。……ブチャの惨状が明らかになったのはロシア軍が撤退した後である。こうした現実を見てしまった以上、ウクライナにとっての平和は、ロシア軍が国内から完全に撤退したときにしか実現しないことになる。これは、今回の戦争における構図の大きな変化である。……

そして実際、2022年3月末のイスタンブールでの停戦協議で(ロシアのキーウ制圧を阻止した時点でウクライナは、NATO加盟を断念するという条件で現位置での戦闘停止を呼びかけた、と伝えられている)、実質的な前進が伝えられたものの、直後にブチャの惨状が明らかになり、交渉機運は急速に萎むことになった。その後も停戦協議はオンラインで断続的にこなわれたようだが、ほとんど表に出てこなくなった。ロシア側はその後、特に東部における支配地域拡大に重点を移すことになった。

それではウクライナは自らの力でロシア軍を追い出すことができるのか。これが最大の問題である……。」

河東哲夫/元駐ウズベキスタン・タジキスタン大使は現代ビジネス誌にこう紹介しています;

23年6月22日のロシア国家安全保障会議でショイグ国防相はこう述べた。「ロシア、ウクライナ双方とも、ソ連時代に蓄えた兵器は既にほぼ使い切った。ということは、ウクライナ軍の装備はこれから西側から新規供給されるものに大きく依存し、ロシア側は古い機械設備で大増産中の兵器(性能的には劣るかも知れないが)に依存する、ということの意味する。……工業力に優れた西側の方が優位を持っていると思うかもしれないが、西側の兵器の多くは民間企業が製造しており、企業は冷戦終了で設備の多くを廃棄している。政府からウクライナのために増産しろと言われても、明日には停戦するかもしれない戦争のために自分の資金を設備投資に向ける気はない。だから、西側の兵器供給能力は限定的だ」と。

日本の地政学的位置と、周辺国の性向や日々の主張からすると日本が、ウクライナのように理不尽な攻撃を受ける可能性がゼロだとは言えないと思います。それを防ぐにはどうしたら良いのか? また、その準備のための時間が日本に残されているのだろうか? ウクライナの人々の自由のための戦いが犠牲少なく進むことを祈りつつ、日本のことも切実に考えます。

以上